

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 28 日現在

機関番号：32683

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520315

研究課題名(和文)カナダ文学にみる環境テーマ～M. アトウッドが希求する 新ディストピア小説

研究課題名(英文)Environmental Themes in Canadian Literature: New Dystopian Fiction by Canadian writer Margaret Atwood

研究代表者

佐藤 アヤ子 (SATO, Ayako)

明治学院大学・経済学部・教授

研究者番号：70139468

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：環境破壊、種の絶滅、遺伝子工学等に警鐘を鳴らすカナダの作家マーガレット・アトウッドは、環境の危機を人間に伝えるには、「理解の神経回路」を作る物語や文学を含む芸術が必要と強調した。この「理解の神経回路」こそ、出口のない従来のディストピア小説とは違う、新ディストピア小説の構想と解釈し、マッドアダムの物語である三部作Oryx and Crake (2003)、The Year of the Flood (2009)、MaddAddam (2013)で分析し、アトウッドが希求する新小説作法を考えた。

研究成果の概要(英文)：The Canadian writer Margaret Atwood has issued warnings in her fiction, against, for example, environmental disruption, the extinction of species, and genetic engineering. She has emphasized that creating art, including stories or literature with "understanding of neural circuits," is a good way to convince human beings of the environmental crisis they face. I interpret this neural circuit understanding to be incorporated into Atwood's design of "a new dystopian fiction," which is different from "the conventional dystopian fiction that leaves no exit. I have researched this point through an examination of Atwood's "new creative writing" in her trilogy of MaddAddam stories, Oryx and Crake (2003), The Year of the Flood (2009), and MaddAddam (2013).

研究分野：カナダ文学

キーワード：新ディストピア小説 マーガレット・アトウッド Oryx and Crake The Year of the Flood MaddAddam The handmaid's Tale 環境と文学 理解の神経回路

1. 研究開始当初の背景

1985年に出版された Margaret Atwood (マーガレット・アトウッド 1939-) の出世作 *The Handmaid's Tale* (『侍女の物語』) は、キリスト教原理主義勢力によって誕生した男性優位の近未来の宗教国家で、虐げられ生と自由を求めてもがく侍女を描いたディストピア小説である。

三部作、MaddAddam の物語の第一作目として 2003 年に出版された *Oryx and Crake* (『オリクスとクレイク』)、第二作目で 2009 年の *The Year of the Flood* (『洪水の年』拙訳で岩波書店より出版予定) は、出版当初から『侍女の物語』の流れをくむディストピア小説といわれてきた。(因みに、第三部の *MaddAddam* は、本科研が採択された後の 2013 年に出版された。)

しかし私はこの 2 作品が、George Orwell の『1984 年』のような 出口のない ディストピア小説ではなく、出口を示す 新ディストピア小説であり、アトウッドが新しい文学ジャンル 新ディストピア 小説の創造を提示していると分析した。この解釈でアトウッドの新作品群を分析する研究は内外ともまだなかったし、現在でもない。

2. 研究の目的

カナダを代表する作家マーガレット・アトウッドは、21 世紀に入るとフェミニズム小説や歴史小説から大きく転換して、関心を環境に向け、ディストピア小説といわれる三部作 *Oryx and Crake* (2003)、*The Year of the Flood* (2009)、そして *MaddAddam* (2013) を相次いで出版した。本三部作は、人類が存亡の危機にある近未来が舞台で、環境に関わる鋭い問題意識を込めた小説である。環境破壊種の絶滅、遺伝子工学等に警鐘を鳴らすアトウッドは、この危機を伝えるには「理解の神経回路」を作る物語が必要だと語る。この表現にヒントを得て、彼女が描く近未来社会は 出口のない 従来のディストピア小説とは違い、出口を示す 新ディストピア小説ではないかと思う。豊かさの影で人間が重ねてきた環境への ツケ とその 清算 を近作群で分析し、アトウッドの 21 世紀の文学が自然との共生を目指す 新ディストピア小説 という新ジャンルの誕生になることを検

証するのがねらいである。

環境をテーマにした文学は、古今東西を問わず多く出版されてきた。そして現代では、多くの作家が異常気象などの環境の変化をテーマにして書き、警鐘を鳴らしてきた。しかし、「人が注意を払わなかった」とアトウッドは語る。東日本大震災という未曾有の自然災害、それに続く原発事故という人的災害を経験した今日の日本人にとって、いや、この地球上に暮らす全ての生物にとって、先見的な眼差しで創作した 新ディストピア小説を、アトウッドのノンフィクション『負債と報い 豊かさの影』(拙訳で 2012 年に岩波書店より刊行) 等と比較分析する研究は、日本でも、海外でもまだまだみられない。本研究により、日本から貴重な成果を発信するのがねらいである。

3. 研究の方法

2010 年の国際ペン東京大会「環境と文学『いま、何を書くか』」の基調講演でアトウッドは、極度に効率的なテクノロジーが、自然を搾取するために作られたテクノロジーが、今や私たちの命がかかっている広範囲の生物世界を枯渇させていると語り、その危機を人間に伝えるには、「理解の神経回路」を作る物語や文学を含む芸術が必要だと強調した。この講演内容は、MaddAddam の物語を分析する本研究で大変貴重な資料となっている。さらに、『負債と報い 豊かさの影』は、MaddAddam の三部作解釈の予備知識を与えてくれるノンフィクションである。

アトウッドは、カナダ文学批評のカノンとも言える『サバイバル：現代カナダ文学入門』(*Survival: A Thematic Guide to Canadian Literature* 1972) で、カナダ文学には脈々と続く独自のアイデンティティというべきテーマがあることを確認してみせた。それは、「生き残ること」。しかし、モザイク化が進む現代のカナダ社会や文学界に、“Canadian identity” (カナダらしさ) を見つけることは困難になっている。ポスト・コロナの作家たち、批評家たちの声を借りれば、カナダらしさがないのがカナダらしさであると論じ、アトウッドの「サバイバル論」を否定する。しかし意図的なのか否かはわからないが、この「生き残り」のテーマが健在であることを、アトウッドは最近作

MaddAddam の物語 三部作で明確に示している。このような視点を見据えながら、「カナダ文学にみる環境テーマ～M.アトウッドが希求する 新ディストピア小説」を考えてきた。

旧知のアトウッド氏には、トロント等カナダで意見交換を行い、貴重な意見を頂いた。アトウッド研究者として著名なロンドン大学の Coral Ann Howells 教授、ブリティッシュ・コロンビア大学の Sherrill Grace 教授、Eva-Marie Krollner 教授等とも意見交換を行い、貴重な見解をいただいた。

4. 研究成果

カナダ文学の古典的名著とされる *Survival: A Thematic Guide to Canadian Literature* (1972) でアトウッドは、自然は危険で脅威だと示しながら、将来はその自然が壊れてしまうと予言した。そして、本書の最後に二つの質問を記した。「われわれは生き残ってきたのか。もしそうならば、生き残ってその後何が起こるのか」と。アトウッドは警告してきた。今、私たちは生き残るために地球を守らなくてはならない時代であると。そして小説家には、社会的良心があると。登場人物の行為を見せれば、読者がそれについて何も考えを抱かないというわけにはいかないと。

The Handmaid's Tale (『侍女の物語』) を含め、『オリクスとクレイク』と『洪水の年』と『マッドアダム』はディストピア小説と言われている。2010年の国際ペン東京大会で基調講演者として来日した時、浅田次郎氏との対談が行われた。その中でアトウッドは、『オリクスとクレイク』及び『洪水の年』は「ジョージ・オーウェルの『1984年』の続きのような世界」とであると語っている。私は、この「続きのような世界」にヒントを得た。アトウッドが21世紀から取り組んでいるマッドアダムの物語が、従来型のディストピア小説とは違う新ディストピア小説という新ジャンルの誕生ではないかと。ディストピア小説は、ジョージ・オーウェルの『1984年』のように、架空の社会を描写することで、現在の社会を批判することが主眼であった。『侍女の物語』もそうであった。しかし、今や批判だけでは済まない環境になっている。環境破壊、異常気象、種の絶滅はすごい勢いで進んでいる。SF小説世界のように、

人の臓器を持つ豚、植毛用に開発された毛髪で覆われた羊など、遺伝子組み換え技術で誕生した生物がアトウッドの近未来小説ではのさばりはびこっている。「奇抜な設定にも思えるが、これは荒唐無稽な話ではない。物語の世界が示すように人類はすでに新しい生物を作り出す手段を手に入れている」とアトウッドは強調する。

2010年の国際ペン東京大会「環境と文学『いま、何を書くか』」の基調講演で、アトウッドは、危機を人間に伝えるには「理解の神経回路」を作る物語や文学を含む芸術が必要だと強調した。この「理解の神経回路」こそ、出口のない従来型のディストピア小説とは違う新ディストピア小説の構想を可能にする、と私は解釈する。

アトウッドは、環境運動家として、環境問題について政治的提言、講演を積極的に行っている。特に、鳥類の生態系保全を指標とするバードライフ・インターナショナルへの関わりは古い。このような活動からも、彼女の関心がいかに環境に向いているかが分かる。アトウッドは語る。「今、私たちは生き残るために地球を守らなくてはならない」と。アトウッドが21世紀初頭から取り組んでいる近未来社会を描いたマッドアダムの物語は、出口のない従来型のディストピア小説とは違い、希望へ向かう出口を示す新ディストピア小説とみなせるのではないだろうか。豊かさの影で人間が重ねてきた環境へのツケとその清算をアトウッドの近作群で分析し、アトウッドの21世紀の文学が自然との共生を目指す新ディストピア小説という新ジャンルの誕生になることを検証した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

佐藤アヤ子「マーガレット・アトウッドが描く新ディストピア小説」『カナダ文学研究 第20号』日本カナダ文学会発行 105 - 116頁 2012年12月

佐藤アヤ子「カナダらしさを求めて」『北海道アメリカ文学 第31号』日本アメリカ文学会北海道支部発行 26 - 36頁 2015年3月

[学会発表](計5件)

佐藤アヤ子、マーガレット・アトウッドが描く『新ディストピア小説』、日本カナダ文学会第30周年記念大会、2012年7月29日

佐藤アヤ子、カナダらしさを描く『アメリカの影響からの脱却』アメリカの隣に暮らすことは、象の隣に寝ているようなもの、日本アメリカ文学会北海道支部大会、藤女子大学(北海道札幌市)、2014年06月28日

Sato Ayako, Margaret Atwood's Maddaddam trilogy, ental Studies Association of Canada, Lakehead University(Canada), 7-10 August 2014

佐藤アヤ子、カナダらしさを描く『アメリカの影響からの脱却』、日本アメリカ文学会第53回全国大会、北海学園大学(北海道札幌市)、2014年10月04日~2014年10月05日

佐藤アヤ子、カナダ文学の「今」、中部支部第32回支部大会、名城大学(愛知県名古屋市)、2015年4月26日

[図書](計2件)

マーガレット・アトウッド著、佐藤アヤ子訳、『洪水の年』、岩波書店、2016秋刊行、530頁

コーラル・アン・ハウエルズ他著、佐藤アヤ子他監修訳、『ケンブリッジ版カナダ文学史』、彩流社、2016年7月刊行

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤アヤ子 (SATO, Ayako)
明治学院大学・経済学部・教授
研究者番号：70139468